

「沖縄を元気にする農業ブランド」プロジェクト第1回
“沖縄を元気にする農業ブランド:若者を育成する農業”セミナー & 座談会
活動報告

日 時：平成22年5月16日(日)午後1時半～4時

会 場：沖縄市民会館 中ホール

参加費：無料

参加者：約60名

パネリスト

上里 昭夫 氏 稲作アドバイザー・ふれあいガーデン代表

島袋 恵美子 氏 峠の茶屋代表

渡辺 宏光 氏 サン農園(自然養鶏)代表

コーディネーター：近藤 正隆 氏

(特定非営利活動法人ウヤギー沖縄 理事長)

平成22年5月16日(日)、沖縄市民会館中ホールにて「沖縄を元気にする農業ブランド」プロジェクト第1回、“沖縄を元気にする農業ブランド:若者を育成する農業”セミナー & 座談会を開催しました。セミナーは、沖縄が持つ農業のブランドと、国の農商工連携というシステム、そして若者の就労支援という3つのテーマを上手くつなぎ合わせて沖縄を元気にしていくことを目的としており、農業関係者や流通業者、若者自立支援関係者など幅広い職種の方に参加いただきました。



シンポジウムと座談会の様子

第一部では専門家を交えたシンポジウムを、第二部では専門家と参加者らが直接意見を交換し合う座談会を行いました。

上里昭夫氏(稲作アドバイザー・ふれあいガーデン代表)

上里氏は、水田による稲作について、赤土の海への流出を防ぎ、地下水が確保できるようになるので沖縄の環境保全のために必須である、また子どもたちの情操教育にも有効で、若者の雇用増大にも繋がると指摘、かつて沖縄でも盛んだった稲作を見直そうと訴えました。

島袋恵美子氏(峠の茶屋代表)

島袋氏は、近所の農家から提供された有機野菜を加工して消費者に販売する自身の飲食店の事例から、お客のニーズは少量でも多品目、安定供給されるもの、一家族の夕食で使いきれもの、「~さんの作った野菜おいしいね」と子どもと会話できる食卓の風景であると紹介。旬の野菜を湯がく、塩付けする、皮をむくなど使いやすい形にまで加工し、ニーズに応えると評判が上がり、最終的には農家の方にも意欲が生まれるとし、生産者と消費者が上手に結びついた事例を紹介しました。

渡辺宏光氏(サン農園・自然養鶏)

渡辺氏は「農は国の命だ、土は農の命だ。土、転じて生命だ」と述べ、農業をするには健康な土地が必要とし、有機農法の必要性を訴えました。そして、遊休地が広がるなか、後継者育成をしてこなかった従来の農業を反省し、この背景に「農業は儲からない」という通説がある、遊休地と非常な人材不足の現状を打破するために、若い方々の就労の場にする必要があると訴えました。

参加者からの意見

農業で生活できるのか？宮古島出身で島はほとんどさとうきびの単一作物大量生産だ。ブランド化するために有機について勉強したい。(20代 男性)

口ハスに憧れている。感覚的にこれからは農業という思いがあるが、実際にどうすれば？いつも悩む。若い自分がどうやって農業に関わっていけるか模索している。(20代 女性)

元ケアマネージャーで農業は定年後の生き方。3年前から自分の食べる分量を農業で生産。幼少時の家業だったこともあり、有機農法をやっている。新しい野菜の具体的な栽培方法について勉強したい。(60代 女性)

島に帰って、農業、工業、観光を一体化していきたい。どんな作物を作っても、誰一人ありがとうを言ってくれない。農業に「ありがとう」の言葉を復活させる必要がある。農家が直接販売まで携われるかどうか？チャレンジしたい。(NPO職員 男性 40代)

綺麗で珍しい食物、安全・安心なブランドは「あたりまえ」の時代だ。これ以上のものをどうやって創っていくかが課題。(40代 女性)